未来へつなぐ水

沖縄県　宮古島市立下地中学校二年　友利　歩夢

「十三歳！真夏の大冒険」という印象的な実況が、テレビから幾度となく流れ、私と同い年の女の子が金メダルを獲得し、大いに盛り上がった東京オリンピック。私は連日の日本選手の活躍に、朝から晩までテレビに釘付けの毎日を過ごしていた。その中で、陸上競技を見ている時のことだ。エチオピアの選手がテレビに映った。それを見ながら、何気ない父との会話のやり取りでエチオピアの子どもは、片道四時間かけて水くみに行くという現実を知った。しかも、その苦労して手に入れた水も、安全な水ではないのだ。

私は最初、「水を汲みに行く」という意味があまり理解できなかった。なぜなら、水は蛇口をひねれば出てくるものであり、あまりにも生活の中に当たり前にあるものだったからだ。そこで私は世界の水事情について調べてみた。ユニセフのホームページによると、安全な水が手に入らない人は、世界で六億三百万人もいるそうだ。そして、子どもたちが長時間かけて水を汲むことで、教育の機会が奪われたり、不衛生な水を飲むことによって命を落としたりすることもある。これは、私たちが同じ時間を過ごし生きる、この地球上での出来事なのだ。

私の一日で水を使う場面を思い浮かべてみた。洗顔、トイレ、食事、歯磨き、手洗い、掃除、振り返るだけでも数多くある。また、今、皆が戦っているウイルスの感染予防には手洗いが必須であり、もちろん水が必要不可欠だ。これが、簡単に水が手に入らない状況だとしたら、どうだろうか。私たちの生活に多くの支障をきたすだろう。それどころか、命さえも奪われかねない。なのに、私は今までそのことに気づかずに、手を洗う時も、水は流しっぱなし。それがどれほど大切なものか、それを得るために苦労している現実があるか、考えたこともなかったのかもしれない。毎日当たり前のようにしている「手を洗う」ということも、貴重な水を使って命を守っている。水は生活と命につながっているのだと感じた。

また、自分自身の住んでいる地域の水について調べてみた。宮古島でも、昔は「うりがー」とよばれる洞くつの底にある湧き水の場所まで、歩いて水汲みをしていたという事実を知った。その湧き水を中心に集落が作られ、人々は暮らしてきた。島全体に水道が普及したのは一九七七年。つまり、きれいな水が平等に島の人に届くようになったのも、そう遠い昔のことではない。暮らしの中心に水があり、多くの先人たちの知恵や協力があって、今の当たり前があることに改めて気づかされた。

私の家の近くにも、崎田川という湧き水がある。透き通った水は美しく、多くの生き物が存在する。家族や友達と水遊びをした思い出の場所だ。この湧き水は、与那覇湾へとつながっている。与那覇湾は、水鳥の生息地として重要な湿地として、ラムサール条約に登録された。マングローブ林の豊かな自然広がるこの景色も、スプリンクラーが勢いよく回るさとうきび畑も、水あってのものだ。この島に生まれてきたことに感謝し、これからもこの豊かな水を守り続けていかなければならない。ポイ捨てをしない。生活を見直し、節水をするなど、水のためにできることを小さなことからでも取り組もうと心に決めた。

私は、今までよりもありがたみを持って水を使うようになった。水があるからこそ生活ができる。命を守っていくことができる。その水の恩恵は、金メダルを獲得した十三歳にも、遠くの国の十三歳にも、小さな島の十三歳の私にも平等でなければならないと思う。多くの命を守るために、豊かな水がある「当たり前」を、世界や未来へと届けるために、私はこれらからも問題と向き合い、今できることは何か、考え、行動し続けていきたい。